

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	20226011	研究期間	平成20年度～平成24年度
研究課題名	高密度振動モニタリングによる社会基盤施設の極限性能評価法	研究代表者 (所属・職)	藤野 陽三（東京大学・大学院工学系研究科・教授）

【平成23年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
	A+ 当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A 当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	B 当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C 当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
<p>(意見等)</p> <p>本研究は、構造物の固有振動に関する理論を基に、構造物に生じている微小な振動を計測し、それを分析して生じている欠陥等を見つけ、構造物の健全度を評価する手法を総合的にまとめあげることが目的としたものである。</p> <p>国内外で大規模な実構造物の計測（センシング）を複数実施し、その分析を通して、研究代表者らが開発してきた手法の有効性を示すとともに、その成果を国際的なジャーナルに多数公表し、国際会議でも基調講演や招待講演を多数行って、国際的にも高い評価を得ている。</p> <p>現状では、当初の目標に向けて順調に研究が進展している。なお、研究を通して新たな展開も見出していることから、最終的には期待以上の成果が見込まれる可能性が高い。</p>	

【平成25年度 検証結果】

検証結果	<p>本研究は、いくつかの大規模実構造物の振動モニタリングデータの取得と分析研究、ワイヤレス・センシング研究、及び情報プロセス・マネジメント研究を協働実施して、社会基盤施設の終局性能評価の方法論を構築体系化したもので、極めて学問的及び社会的意義の高いものになっている。</p> <p>また、その研究成果は国際的なジャーナルにも多数公表され、国際会議でも基調講演・招待講演等を多数行って、国際的にも高い評価を得ている。研究進捗評価結果と比べ更に進展した研究成果であった。</p>
A+	